

# 日本における価値意識の構造

## — POSA (Partial Order Scalogram Analysis) によるデータ解析 —

### A Structure of Value in Japan

#### — Data Analysis using POSA (Partial Order Scalogram Analysis) —

栗田 真樹\*

Maki Kurita

本研究は、日本における価値意識の構造を、世界価値観調査日本データを用いて検証した。価値観測定のための 12 項目が設定されている 4 回の調査データを分析の対象とし、手法としては L. Guttman の Facet 理論に基づく SSA と POSA、分析の枠組みとしては T. Parsons の AGIL 図式を用いた。価値観の多様化が指摘されているが、時系列的にみれば AGIL (経済・政治・社会・文化) に関する価値の一次元性が強くなる傾向が明らかになった。

キーワード：世界価値観調査 Parsons Guttman Facet 理論 POSA

## I. はじめに

近年、大規模な国際比較調査がいくつかのプロジェクトでなされ、そのデータが公開されることによって、国際比較が可能となって来ている。国際比較を行う時、何らかの基準、尺度が必要となる。この国際比較調査の企画立案者であるアメリカ・ミシガン大学のロナルド・イングルハート (Ronald Inglehart) は物質主義志向—脱物質主義志向という軸と政治的・宗教的特徴によって、国際比較を行っている<sup>1)</sup>。つまり、政治学者である彼にとっての分析の目的は人びとの価値意識によってその国の政治的状況を説明しようとするものである。全世界を一つの枠組みで分析しようとするイングルハートの分析は非常に意欲的なものであるが、これらの尺度はイングルハートに限らず、研究者それぞれの拠って立つところに大きく依存する。すなわち欧米の視点からの分析とは異なる状況、文化的視点、社会構造などが、異なる文化において存在するのであれば、全世界を比較するための「単一の」共通した尺度では比較検討することが困難になる。たとえば東アジア特有の価値意識の構造が存在するのであれば、日本と韓国、中国などの諸国との比較は可能であったとしても、全世界的な比較はあまり意味を持たなくなる。しかしながら、比較のためには単一で共通の尺度を使用しなければならなくなるという「ジレンマ」が存在するのである。

---

\*流通科学大学サービス産業学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

本研究では、その単一の共通した尺度を価値の一次元性という観点から、T.Parsons の AGIL 図式<sup>2)</sup>を下敷きとして、探索的に構成しようと試みるものである。尺度構成のためのデータとしては世界価値観調査データを用いる。世界価値観調査以外にも、東アジア、環太平洋における国際比較調査も行われてきている。ここで、これらを用いずに世界価値観調査データを用いるのは、このデータの二次的利用が容易であるためである。分析のためのデータは世界価値観調査のサイトから、簡単な申請手続きによってダウンロードが可能である。また、今後の研究として、全世界的な国際比較分析を行うことを目指しており、この研究はその尺度を探するための探索的な試みである。

## II. 世界価値観調査

世界価値観調査 (World Values Surveys) はアメリカ・ミシガン大学のロナルド・イングルハート教授を中心として 1981 年から行われている。これらの調査は、イングルハート教授と各国の調査機関との共同調査のかたちで行われ、現在まで、ほぼ 5 年ごとに行われ、これまで大きく 5 回 (1981 年～1984 年、1989 年～1993 年、1994 年～1999 年、1999 年～2004 年、2005 年～2007 年) 行われてきている。現在は 2010～2014 年の最新の調査が行われつつある。同じ回の調査において個別の調査は若干の調査年月のずれがあるために、前後の調査との区別をするために「ウェーブ (Wave: 波)」と呼び「同じウェーブ」が比較の単位とされている<sup>3)</sup>。

データはインターネットサイトで公開されており<sup>4)</sup>、インターネットを介して簡単な申請手続きをすれば使用が可能である。今回は、現時点でデータが時系列で比較可能な形で公開されている第 5 ウェーブ (2005～2007 年) までのデータを用いる。

国際比較のためには、調査法、サンプリング方法、サンプルサイズなどを考慮する必要がある。また、調査に関する技術的な相違点や、共通言語として使用される英語による調査票が各国に翻訳される際の翻訳の問題、その調査票を構成する質問文の背後にある文化的な要因を考慮すれば単純集計をそのまま比較することが可能かなど、様々な問題点が存在する。しかしながら、このような国際比較が可能な大規模調査は非常に少なく、また多くの人が容易に利用可能であるという点で非常に有益である。

以上のような、諸問題をふまえて、栗田 (2012) においては物質主義—脱物質主義尺度の再構成を行い、T.Parsons のパターン変数による AGIL 図式、L.Guttman の Facet 理論にもとづく Mapping Sentence<sup>5)</sup>を援用して、これらの質問項目を分類、再構成した。価値意識にも AGIL の四次元を援用して解釈するこの可能性を指摘した<sup>6)</sup>。本研究では、この結果に基づいて、さらに構造の一次元性をコンピュータソフト (WHUDAP) によって再確認するとともに、POSA によって価値意識の構造を明らかにする。これらはさらなる国際比較のための準備作業として位置づけられるとともに、日本における価値意識の構造を明らかにしようとするものである。

### Ⅲ. 価値観尺度

イングルハートは人びとの価値は、人びとがある選択状況においてものごとを決定する優先順位に現れると考える。その優先順位を測定するために、4項目の3セット、合計12項目の価値観測定のための質問項目を用い、尺度を構成する。すなわち、4つの項目のうちどの項目を優先するかによって、人びとの価値観を捉えようとするのである<sup>7)</sup>。

以下に12項目を示す。これらの項目は、当初の文言(ワーディング)から少し修正を加えられ、現在では以下のとおりとなっている。なお、便宜的に質問番号(Q\*)を振っている。

以前は、これら12の項目をすべて考慮して、一番望ましいもの、二番目に望ましいもの、一番重要でないものを尋ねる質問が設定されていたが、現在はこれらの項目は設定されていない。

#### 資料1. 価値観に関する質問項目

わが国の向う10年間の国家目標をどう設定したらよいかについて、よく議論されます。次に、いろいろな人が最も重視する目標がいくつかあげてあります。

1. 高い経済成長を維持すること
2. 十分強い防衛力を持つこと
3. 人々が職場や地域社会での物の決め方にもっと発言できるようにすること
4. われわれの都市や農村をもっと美しくするように努力すること

Q1 あなたはこれらの中で何が最も重要だと思いますか。

Q2 では、二番目に重要だと考えるのはどれですか。

1. 国家の秩序の維持
2. 重要な政府決定に関してもっと国民に発言権を与える
3. 物価の抑制
4. 言論の自由の擁護

Q3 もし選ぶとしたら、次の中で何が最も重要だと思いますか。

Q4 では、二番目に重要だと考えるのはどれですか。

ここに別な目標があります。

1. 経済の安定を目指す
2. より人間的で暖かみのある社会を目指す
3. お金よりも知識や思考が重視される社会を目指す
4. 犯罪の撲滅を目指す

Q5 あなたの意見では、この中で何が最も重要だと思いますか。

Q6 では、二番目に重要だと考えるのはどれですか。

これらの項目は人びとの意識が物質主義的志向なのか、脱物質主義的志向なのかを捉えるものとして再構成される。すなわち、表1のように分類される各項目を尺度化することによって、「物質主義—脱物質主義尺度」として用いられる。

手続きとしては、各項目が何番目に選択されたかによって、各項目を各変数とし、物質主義—脱物質主義尺度として構成する。すなわち、各項目が1番目に選択された場合には「2」を付与し、2番目に選択された場合は「1」を付与する、その他の項目が選択された場合は「0」とすることによって、12項目の各得点を計算し、それらを合計することで、尺度化を行う。具体的な手続きは「A 高度経済成長を維持していくこと」を例にとり、統計パッケージソフトであるSPSSのシンタックスとして資料2に示している。

表1. 物質主義的項目と脱物質主義的項目

物質主義的項目	脱物質主義的項目
A 高度経済成長を維持していくこと (growth)	C 職場や地域社会でのものごとの決定にもっと人々の声を反映させること (sayjob)
B 強力な防衛力を確保すること (defense)	D 自分の住んでいる町やいなかをもっと美しくしようとする事 (beauty)
E 国内の秩序を維持すること (order)	F 重要な政府の決定にもっと人々の声を反映させること (saygovt)
G 物価の上昇をくいとめること (price)	H 言論の自由を守る事 (speech)
I 経済の安定につとめる (econo)	J 人格を尊重するもっと人間的な社会へと前進すること (humane)
L いかなる犯罪とも戦っていくこと (crime)	K 思想が金銭より重視される社会へと前進すること (ideas)

(筆者作成)<sup>8)</sup>

資料2. 12項目をそれぞれ変数とするためのSPSSシンタックス

```
IF (Q1=1) growth1=2.
IF (Q1=2 or Q1=3 or Q1=4) growth1=0.
IF (Q2=1) growth2=1.
IF (Q2=2 or Q2=3 or Q2=4) growth2=0.
COMPUTE growth=growth1+growth2.
(以下同様に、他の項目もそれぞれを一つの変数とした。)
```

(筆者作成)

#### IV. Facet 理論

T.パーソンズ (Talcott Parsons) のパターン変数 (Pattern Variables) の考え方、ならびに L.ガットマン (Louis Guttman) のファセット理論 (Facet Theory) とそれに基づくマッピングセンテンス (Mapping Sentence) の技法を用いて、これらの質問項目の再構成を行った。

T.パーソンズは、社会システムに関して、環境 (外界) に対する関係と内的な分化統合のために、要求充足が必要であるとする。その欲求充足に関して①目的志向 (外的・内的: external/internal) と②目的達成のための手段志向 (自己完結的・道具的: consummatory/instrumental) という2つの軸の組み合わせによって4つの社会の下位システムを提示している<sup>9)</sup>。

「適応 (A: Adaptation)」は「外的・道具的」な欲求を充足するもので下位システムとしては、「経済」にあてはまる。「目標達成 (G: Goal Attainment)」は「外的・自己完結的」な欲求を充足するものであり、「政治」にあてはまる。「統合 (I: Integration)」は「内的・自己完結的」な欲求を充足し、「社会」にあてはまる。「潜在性 (L: Latency)」は「内的・道具的」な欲求を充足し「文化」にあてはまる。なお、これらの分析視点はマーケティングで用いられる PEST 分析などにも影響を与えていると考えられる<sup>10)</sup>。

ガットマンは質問項目をファセットの組み合わせによって構成されると考え、通常一次元で考えられる質問項目を多次元的に取り扱っている<sup>11)</sup>。

これらの質問項目においては、質問を受けた「回答者」(X) は、「ある領域」(ファセット A: AGIL 図式) に関する、「ある行動様式」(ファセット B) を、「重視しているか - 重視していないか」、について答えていると考えることができる。

しかし、質問項目を作成する段階からこれらのファセットは考慮されていなかったのではないかと考えられる。特にファセット B については使用される文言が統一されておらず、行動様式を測定する明確な意図はなかったと考えざるを得ない。そこで、マッピングセンテンスを用いて、これらのファセットを再構成した。

それぞれの項目に、経済、政治、社会、文化に関する文言が入っているが、AGIL 図式を文言通りに当てはめるのではなく、質問文の意味を領域に当てはめて分類した。例えば、「重要な政府の決定にもっと人々の声を反映させること (saygovt)」は、「政府」という文言から「政治」に分類することも考えられるが、「政治への参加」という意味においては「社会」の領域にあてはまると考えるのである。

これらの考察に従って、ガットマンのファセット理論をもとに開発されたソフトウェア Hudap (Hebrew University Data Analysis Package) を使い SSA (最少空間法: Smallest Space Analysis) を行う。

表 2. 12 項目の領域と行動様式

質問項目	領域	行動様式
A 高度経済成長を維持していくこと (growth)	A	維持していく
B 強力な防衛力を確保すること (defense)	G	確保する
C 職場や地域社会でのものごとの決定にもっと人々の声を反映させること (sayjob)	I	もっと (人々の声を) 反映させる
D 自分の住んでいる町やいなかをもっと美しくしようとする (beauty)	L	もっと (美しくしよう) する
E 国内の秩序を維持すること (order)	G	維持する
F 重要な政府の決定にもっと人々の声を反映させること (saygovt)	I	もっと (人々の声を) 反映させる
G 物価の上昇をくいとめること (price)	A	くいとめる
H 言論の自由を守ること (speech)	L	守る
I 経済の安定につとめる (econo)	A	安定につとめる
J 人格を尊重するもっと人間的な社会へと前進すること (humane)	I	もっと (人間的な社会へと) 前進する
K 思想が金銭より重視される社会へと前進すること (ideas)	L	前進する
L いかなる犯罪とも戦っていくこと (crime)	G	戦っていく

(筆者作成)<sup>12)</sup>

この分析法は項目間の関連性が強ければ近い距離に空間布置がなされるというものである。また、ガットマンはこれらの項目間の空間布置に関して「Polar：共通の原点からの区分線が円をいくつかのくさび形 (V 字形) に分割する」「Modular：共通の原点の周りにいくつかの同心円を描いて空間を分割する」「Axial：矩形をいくつかの小さな矩形にスライスするように分割する」3つのパターンを示している (ファセット理論「第二の法則」)<sup>13)</sup>。

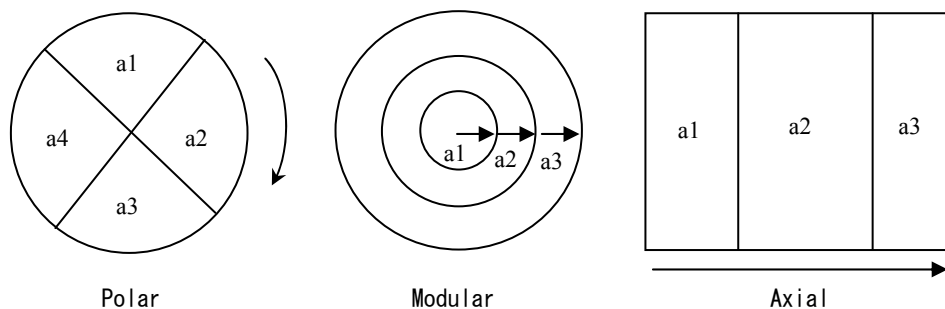


図 1. ガットマンのファセット理論 (第 2 の法則)

(出所：『ファセット理論と解析事例』木村通治・真鍋一史・安永幸子・横田賀英子、ナカニシヤ出版、2002 年。P5 を一部修正して筆者作成)<sup>14)</sup>

## V. SSA (Smallest Space Analysis)

AGIL 図式、Mapping Sentence に基づき、SSA を行った。SSA のプログラムを以下資料 3 に示す。

まず、SET NAME,DATA,FILE 部分でデータの定義を行う。ここでは SPSS で作成したサブデータセットを用いており、ID を示す s002,脱物質主義尺度である pm4 と pm12 をデータ化している。指示語"FILE"以下が今回の分析の過程であるが、まず MONCO (weak monotonicity coefficients) を行い、それに基づき WSSA1 (Weighted Smallest Space Analysis, 「1」はシンメトリックを表している) を行っている<sup>15)</sup>。

WSSA1 では 12 項目に profiles として「AGIL の 4 次元」(A=1,G=2,I=3,L=4) と「物質主義・脱物質主義の 2 次元」(物質主義を 1、脱物質主義を 2) を指定している。これは、各 profiles によって、12 項目が空間布置されるかを見るための指示である。プログラムの最後の部分に表記している POSA (POSAC) については下で説明する。

資料 3. SSA と POSA のための WHUDAP プログラム

```

$SET NAME = 'WVS Japan POSA 2';
$DATA
  NAMES = s002 pm4 pm12
           growth defense sayjob beauty order saygovt price speech
           econo humane ideas crime A G I L 1-38;
  MISSINGS = s002 pm4 pm12
           growth defense sayjob beauty order saygovt price speech
           econo humane ideas crime A G I L 9;
FILE = 'C:\wvs\japan_posa2.dat' ;
$MONCO NAMES=growth to crime;
  OUTPUT MEMORY;
$WSSA1 NAMES=growth to crime;
  MaxDim=2;
  facets
    nfacets=2/ profiles=growth 1 1   defense 2 1
    sayjob 3 2                       beauty 4 2
    order 2 1                         saygovt 3 2
    price 1 1                         speech 4 2
    econo 1 1                         humane 3 2
    ideas 4 2                         crime 2 1/
  diagrams=2 1 1 2 & 2 2 1 2;
$POSAC NAMES=A G I L;

```

(筆者作成)

これらの結果は以下の図2-(1)から図2-(4)のとおりである。WHUDAPではFacetに基づき各領域を”Polar”、”Modular”、”Axial”の3つのパターンでそれぞれコンピュータによって分割し、その分割された領域に各項目が布置される指標として”Process Regionality”を算出することができる。上記 Mapping Sentence の Facet A に基づき、”Axial”を指定した結果、第2 ウェーブ：0.839、第3 ウェーブ：0.867、第4 ウェーブ：0.910、第5 ウェーブ：1.000 となった。この数値は、1に近づくほどその領域に項目が布置されることになる。したがって、時系列的に見て、各領域への布置がより鮮明になって来ていると言える。

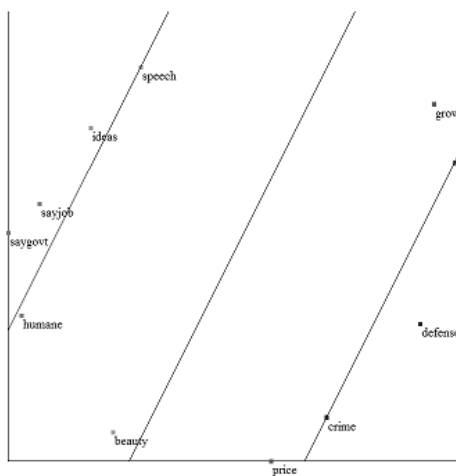
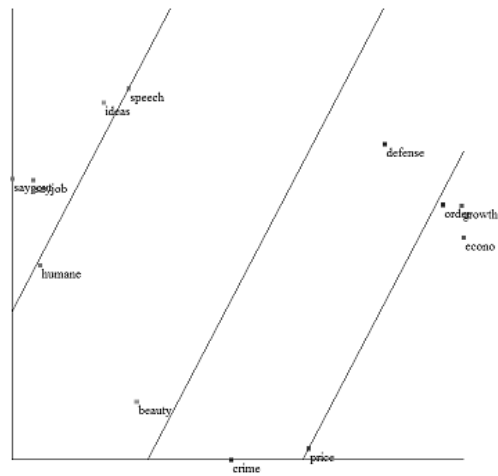
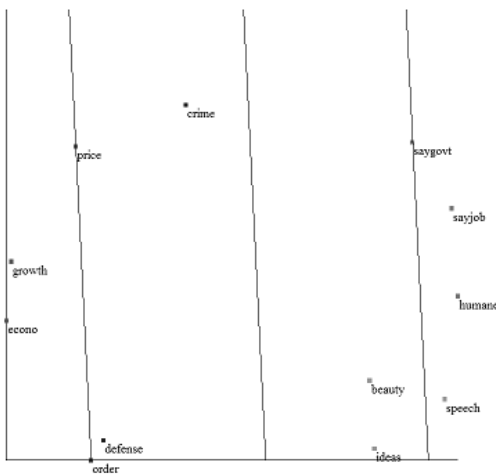


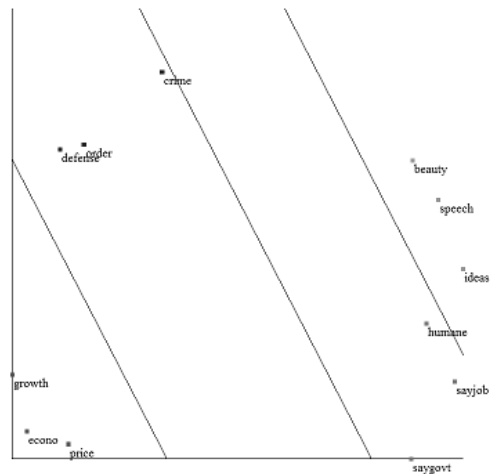
図2. (1) 価値12項目のSSA (第2ウェーブ)  
(筆者作成)



(2) 価値12項目のSSA (第3ウェーブ)  
(筆者作成)



(3) 価値12項目のSSA (第4ウェーブ)  
(筆者作成)



(4) 価値12項目のSSA (第5ウェーブ)  
(筆者作成)



## VI. AGIL 尺度の構成

以上は 12 項目を空間布置したものであるが、これらに基づいて、A（経済）、G（政治）、I（社会）、L（文化）の四つの次元の尺度化をそれぞれ行った。具体的な作業手順を SPSS（Statistical Package for the Social Sciences）のシンタックスで示すと以下資料 4 のとおりとなる。

次に、POSA（Hudap では POSAC）を行った。POSA のプログラミングは資料 3 に含まれている。

まず、それぞれの領域の得点を単純に加算した。次に、これらを再コード（RECODE）する際、今回は「ある=1」「ない=0」に二分した。程度による細分化ではなく、二分法を採用するのは、それらの項目を選択するかしないかがまず重要であると考える点と、POSA（Partial Order Scalogram Analysis）の分析を容易にするためである。

資料 4. AGIL 尺度構成のための SPSS シンタックス

```
COMPUTE A=growth+price+econo.
COMPUTE G=defense+order+crime.
COMPUTE I=sayjob+saygovt+humane.
COMPUTE L=beauty+speech+ideas.
VARIABLE LABELS A '経済'.
VARIABLE LABELS G '政治'.
VARIABLE LABELS I '社会'.
VARIABLE LABELS L '文化'.
RECODE A G I L (0=0) (1 thru 7=1) .
```

（筆者作成）

上で作成した 4 つの尺度間の相関を見ると、かなり低い値となっている。これは、イングルハートが「あるものを他のものより優先させる順位」を価値観としているためであり、結果として、「ある項目が選択されれば、他のある項目が選択されない」ため生じることである。

ガットマンは諸項目間の関係が一次元性を示す構造として”シンプレックス（Simplex）”と呼ぶ構造を指摘している。これらの関係は相関係数マトリクスにおいて、対角線に近づくほどその絶対値が高くなるようなものであるとされる。これらの項目間には相関の序列、一次元性が存在するとしている。

表 3. シンプレックス構造の相関マトリクスの例

	A	B	C	D
A	1.00			
B	0.60	1.00		
C	0.40	0.60	1.00	
D	0.20	0.40	0.60	1.00

（筆者作成）

この考え方に基づいて、A（経済）、G（政治）、I（社会）、L（文化）の関係を相関マトリクスで見ると、A-G-I-L と言う序列において、相関係数の絶対値は非常に低く、また絶対値だけでなくプラスマイナスの符号を考慮しなければならないが、「疑似・逆シンプレックス」と呼べる構造が見られる。シンプレックスあるいは逆シンプレックスかどうかについてはさらなる検討が必要であるが、探索的にこの序列を用いて、AGIL を一次元と考えて検討することとする。

表 4 (1) AGIL の相関マトリクス (第 2 ウェーブ) (筆者作成) (2) AGIL の相関マトリクス (第 3 ウェーブ) (筆者作成)

相関係数					
		A 経済	G 政治	I 社会	L 文化
A 経済	Pearson の相関係数	1	-.062	-.065	-.132 <sup>**</sup>
	有意確率 (両側)		.115	.098	.001
	N	655	655	655	655
G 政治	Pearson の相関係数	-.062	1	-.123 <sup>**</sup>	-.101 <sup>**</sup>
	有意確率 (両側)	.115		.002	.010
	N	655	655	655	655
I 社会	Pearson の相関係数	-.065	-.123 <sup>**</sup>	1	-.037
	有意確率 (両側)	.098	.002		.340
	N	655	655	655	655
L 文化	Pearson の相関係数	-.132 <sup>**</sup>	-.101 <sup>**</sup>	-.037	1
	有意確率 (両側)	.001	.010	.340	
	N	655	655	655	655

\*\*、相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

相関係数					
		A 経済	G 政治	I 社会	L 文化
A 経済	Pearson の相関係数	1	-.041	-.090 <sup>*</sup>	-.199 <sup>*</sup>
	有意確率 (両側)		.245	.010	.000
	N	823	823	823	823
G 政治	Pearson の相関係数	-.041	1	-.134 <sup>**</sup>	-.107 <sup>**</sup>
	有意確率 (両側)	.245		.000	.002
	N	823	823	823	823
I 社会	Pearson の相関係数	-.090 <sup>*</sup>	-.134 <sup>**</sup>	1	-.075 <sup>*</sup>
	有意確率 (両側)	.010	.000		.032
	N	823	823	823	823
L 文化	Pearson の相関係数	-.199 <sup>*</sup>	-.107 <sup>**</sup>	-.075 <sup>*</sup>	1
	有意確率 (両側)	.000	.002	.032	
	N	823	823	823	823

\*\*、相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

\*、相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

(3) AGIL の相関マトリクス (第 4 ウェーブ) (筆者作成) (4) AGIL の相関マトリクス (第 5 ウェーブ) (筆者作成)

相関係数					
		A 経済	G 政治	I 社会	L 文化
A 経済	Pearson の相関係数	1	-.043	-.086 <sup>**</sup>	-.245 <sup>**</sup>
	有意確率 (両側)		.158	.005	.000
	N	1066	1066	1066	1066
G 政治	Pearson の相関係数	-.043	1	-.127 <sup>**</sup>	-.101 <sup>**</sup>
	有意確率 (両側)	.158		.000	.001
	N	1066	1066	1066	1066
I 社会	Pearson の相関係数	-.086 <sup>**</sup>	-.127 <sup>**</sup>	1	-.062 <sup>*</sup>
	有意確率 (両側)	.005	.000		.042
	N	1066	1066	1066	1066
L 文化	Pearson の相関係数	-.245 <sup>**</sup>	-.101 <sup>**</sup>	-.062 <sup>*</sup>	1
	有意確率 (両側)	.000	.001	.042	
	N	1066	1066	1066	1066

\*\*、相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

\*、相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

相関係数					
		A 経済	G 政治	I 社会	L 文化
A 経済	Pearson の相関係数	1	-.014	-.101 <sup>**</sup>	-.244 <sup>**</sup>
	有意確率 (両側)		.693	.003	.000
	N	845	845	845	845
G 政治	Pearson の相関係数	-.014	1	-.129 <sup>**</sup>	-.118 <sup>**</sup>
	有意確率 (両側)	.693		.000	.001
	N	845	845	845	845
I 社会	Pearson の相関係数	-.101 <sup>**</sup>	-.129 <sup>**</sup>	1	-.027
	有意確率 (両側)	.003	.000		.430
	N	845	845	845	845
L 文化	Pearson の相関係数	-.244 <sup>**</sup>	-.118 <sup>**</sup>	-.027	1
	有意確率 (両側)	.000	.001	.430	
	N	845	845	845	845

\*\*、相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

## VII. POSA (Partial Order Scalogram Analysis)

AGIL の一次元性を捉えるために、POSA を用いて分析を行った。Guttman は「被調査者が 1 次元の連続体上のどこに位置しているかをとらえることによってその回答のパターンを知ろう」<sup>16)</sup>としたのであるが、その一つの手法として、一見矛盾している「多次元における一次元的な回答

のパターン」をとらえようとしたものである。そこで、各次元の意識が「ある (1)」か「ない (0)」かで、Hudap を用いて POSA を行った。

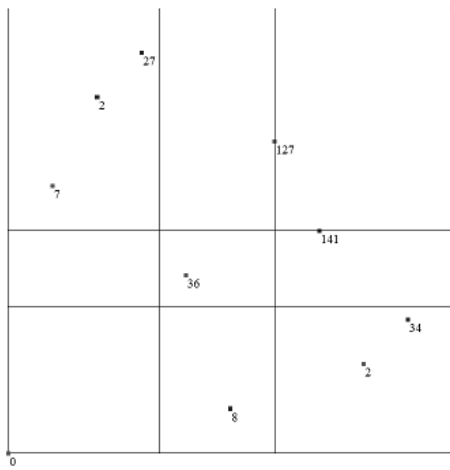
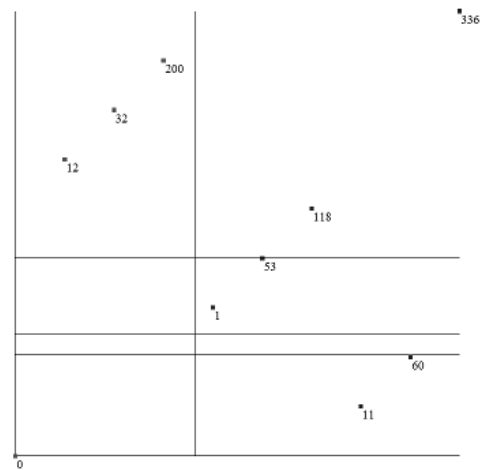
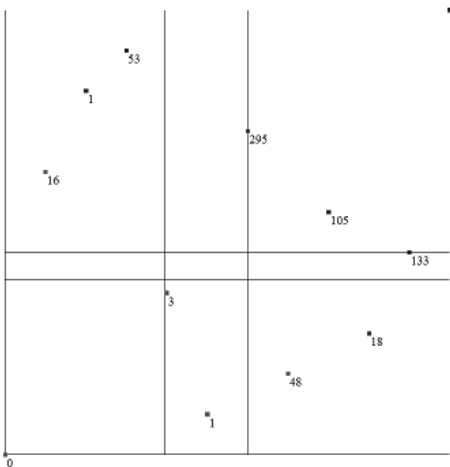


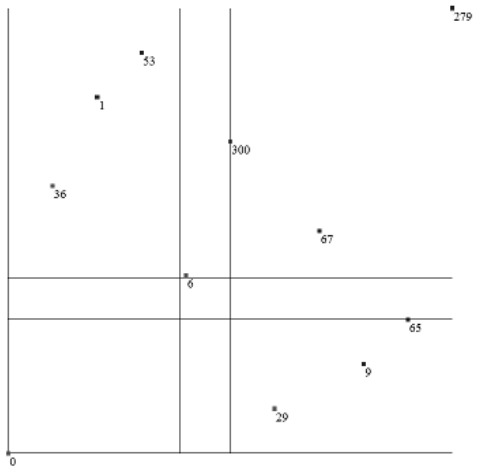
図 3. (1) AGIL に関する第 2 ウェーブの POSAC (筆者作成)



(2) 第 3 ウェーブの POSAC (筆者作成)



(3) 第 4 ウェーブの POSAC (筆者作成)



(4) 第 5 ウェーブの POSAC (筆者作成)

なお Hudap による POSA だけでなく、AGIL の四項目に関して、それぞれ、あるを「1」、ないを「0」とし、新しい変数 AGIL を  $1000*A+100*G+10*I+L$  として計算 (COMPUTE) し、単純集計を求めることによって分析可能である。ここでは、4つのウェーブを比較するために、AGIL とウェーブのクロス集計表を示すこととする。

ここで、AGIL の値が 1111 の場合、すべての項目に「ある」と答えていることになる。第 2 ウェー

ブの場合、271人(41.4%)が「1111」となっている。この値が「111」の場合、Aが「ない(0)」状態を示しており下のダイアグラムでは「0111」と示している。

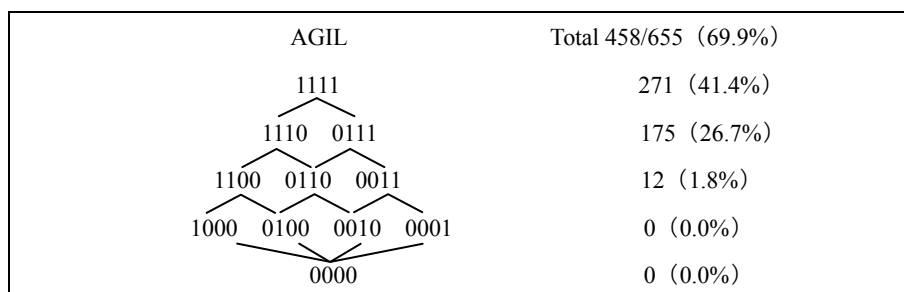


図 4. AGIL の POSA ダイアグラム (第 2 ウェーブ) (筆者作成)

表 5. 各ウェーブにおける AGIL 尺度の分布

AGIL と s002 Wave のクロス表

		s002 Wave				合計	
		2 1989-1993	3 1994-1999	4 1999-2004	5 2005-2007		
AGIL	11.00	度数	8	10	18	9	45
		s002 Wave の %	1.2%	1.2%	1.7%	1.1%	1.3%
	101.00	度数	0	0	1	1	2
		s002 Wave の %	.0%	.0%	.1%	.1%	.1%
	110.00	度数	2	0	3	6	11
		s002 Wave の %	.3%	.0%	.3%	.7%	.3%
	111.00	度数	34	60	105	67	266
		s002 Wave の %	5.2%	7.3%	9.8%	7.9%	7.8%
	1001.00	度数	2	1	0	0	3
		s002 Wave の %	.3%	.1%	.0%	.0%	.1%
	1010.00	度数	36	32	48	29	145
		s002 Wave の %	5.5%	3.9%	4.5%	3.4%	4.3%
	1011.00	度数	141	118	134	65	458
		s002 Wave の %	21.5%	14.3%	12.6%	7.7%	13.5%
	1100.00	度数	7	12	16	36	71
		s002 Wave の %	1.1%	1.5%	1.5%	4.3%	2.1%
	1101.00	度数	27	53	53	53	186
		s002 Wave の %	4.1%	6.4%	5.0%	6.3%	5.5%
	1110.00	度数	127	201	295	300	923
		s002 Wave の %	19.4%	24.4%	27.7%	35.5%	27.2%
	1111.00	度数	271	336	393	279	1279
		s002 Wave の %	41.4%	40.8%	36.9%	33.0%	37.7%
合計		度数	655	823	1066	845	3389
		s002 Wave の %	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

(筆者作成)

このダイアグラム上に分布する人々が全体の何%であるか、すなわち尺度の点数によって、このダイアグラムで再現可能かどうかによって次元性を確認する「再現性係数」は第2ウェーブでは655人中の458人で69.9%、第3ウェーブでは823人中619人で75.2%、第4ウェーブでは1066人中830人で77.9%、第5ウェーブでは845人中697人で82.5%と、時系列的には、近年上昇してきている。これらの再現性係数の解釈については様々な議論がなされてきているが、80%を超えれば次元性があると解釈されている<sup>17)</sup>。その意味では、次元性は低いのであるが、その状況のなかでは次元性が強くなってきており、第5ウェーブにおいては次元性があると判断しても良い数値を示している。近年、「価値の多様化」が指摘される中で、調査データの分析からは「価値の一元化」が示唆される結果となった。さらに、本研究では詳しく言及しなかったが、これらの項目の次元性は、これらの項目をもとに構成される物質主義—脱物質主義尺度の次元性も示唆されることになる。

## VIII. おわりに

以上のように、価値観測定のための12項目を用いたデータ解析において、パーソンズが構想したAGIL図式に関して、その次元性傾向が見られることを明らかにした。SSAの“Process Regionality”においても、POSAによる再現性係数においても、時系列的にその数値が高くなってきている。これらが次元性を持つことは、現在の価値の多様化とは逆の一元化の傾向を示すとともに、これらの諸項目から尺度が構成されることから考えれば、物質主義—脱物質主義尺度が次元性を持つことも示している。価値観の多様化現象の指摘は、共通した尺度で分析することが困難である状況をも指摘していたわけであるが、物質主義—脱物質主義の尺度では測定できないとされる人々が少なくなっている、すなわちPOSAの再現性係数から漏れる人々が少なくなっていることを示しているのであり、物質主義—脱物質主義尺度がさらに説明力を持つようになってきているといえるであろう。

今後の課題としては、なぜこれらのAGIL図式に関して次元性が存在するのか、またなぜ時系列的にみてその次元性が高くなってきているのかについて考察する必要がある。今回の探索的なデータ解析はあくまでも広範囲な国際比較のための準備作業であり、これらについては別稿に譲りたい。

## 注

- 1) Inglehart, R., “Modernization and Postmodernization” Princeton University Press, 1997.
- 2) T.パーソンズ・E.A.シルズ（永井道雄・作田啓一・橋本真（訳））『行為の総合理論をめざして』日本評論新社、1960年。
- 3) 栗田真樹「物質主義から脱物質主義へ — 「世界価値観調査」データによる検証」栗田真樹 流通科学大

- 学論集人間・社会・自然編第25巻第1号(2012年7月号)、19-35.
- 4) World Values Surveys, <http://www.worldvaluessurvey.org/>
  - 5) 真鍋一史『世論の研究』慶応義塾大学出版、1985.
  - 6) 栗田真樹「物質主義から脱物質主義へ — 「世界価値観調査」データによる検証」栗田真樹 流通科学大学論集人間・社会・自然編第25巻第1号(2012年7月号)、19-35.
  - 7) Inglehart, Ronald, “Modernization and Postmodernization” Princeton University Press, 1997.
  - 8) 栗田真樹「物質主義から脱物質主義へ — 「世界価値観調査」データによる検証」栗田真樹 流通科学大学論集人間・社会・自然編第25巻第1号(2012年7月号)、19-35.
  - 9) T.パーソンズ・E.A.シルズ(永井道雄・作田啓一・橋本真(訳))『行為の総合理論をめざして』日本評論新社、1960年.
  - 10) フィリップ・コトラー(恩蔵直人(監修)月谷真紀(訳))『コトラーのマーケティングマネジメント<ミレニアム版>』ピアソン・エデュケーション、2001年.
  - 11) 木村通治・真鍋一史・安永幸子・横田賀英子、『ファセット理論と解析事例』、ナカニシヤ出版、2002年.
  - 12) 栗田真樹「物質主義から脱物質主義へ — 「世界価値観調査」データによる検証」栗田真樹 流通科学大学論集人間・社会・自然編第25巻第1号(2012年7月号)、19-35.
  - 13) 木村通治・真鍋一史・安永幸子・横田賀英子、『ファセット理論と解析事例』。ナカニシヤ出版、2002年.
  - 14) 栗田真樹「物質主義から脱物質主義へ — 「世界価値観調査」データによる検証」栗田真樹 流通科学大学論集人間・社会・自然編第25巻第1号(2012年7月号)、19-35.
  - 15) “Hudap software manual” [www.facet-theory.org/files/HUDAP%20Manual.pdf](http://www.facet-theory.org/files/HUDAP%20Manual.pdf)(ただし、現在 Forbidden となっている。同内容の PDF は [www.europhd.eu/html/\\_onda02/07/PDF/HUDAP%20Manual.pdf](http://www.europhd.eu/html/_onda02/07/PDF/HUDAP%20Manual.pdf)で公開されている。
  - 16) 真鍋一史『社会・世論調査のデータ解析』、慶応通信、1993.
  - 17) 林知己夫、鮑戸弘共編『多次元尺度解析法』、サイエンス社、1976.

#### 参考文献

- 林知己夫、鮑戸弘共編『多次元尺度解析法』、サイエンス社、1976.
- 木村通治・真鍋一史・安永幸子・横田賀英子、『ファセット理論と解析事例』ナカニシヤ出版、2002年.
- フィリップ・コトラー(恩蔵直人(監修)月谷真紀(訳))『コトラーのマーケティングマネジメント<ミレニアム版>』ピアソン・エデュケーション、2001年.
- 栗田真樹、「物質主義から脱物質主義へ — 「世界価値観調査」データによる検証」 流通科学大学論集人間・社会・自然編第25巻第1号、2012年、19-35.
- Inglehart, Ronald, “Modernization and Postmodernization” Princeton University Press, 1997.
- T.パーソンズ・E.A.シルズ(永井道雄・作田啓一・橋本真(訳))『行為の総合理論をめざして』日本評論新社、1960年.
- 真鍋一史『世論の研究』慶応通信、1985.
- 真鍋一史『社会・世論調査のデータ解析』、慶応通信、1993.